The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Cyrano カルテジヤン(2)
Author(s)	赤木, 昭三
Citation	Gallia. 1975, 14, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Cyrano カルテジヤン

(2)

赤　木　昭　三

(e)　シラノとカンパネッラのデカルト論争　二大怪獣サラマンドル(熱)とレモラ(冷)の闘いを見物していたシラノは不思議な老人カンパネッラに遭い，近く太陽帝国の中の「哲学者の国」へデカルトが到着するので，旧交を暖めにもどるという老人のお伴をして出発する．そして道中二人はデカルトの「自然学」すなわち『哲学原理』をめぐって長い議論をかわす．シラノ・カルテジヤン説が主張されたのは主にこの部分のためだし，また最近の研究家 Alcover, Harth 両女史もこの箇所に関して大分意見が違うので，以下全文を掲げて詳しく吟味することにしよう．なおこの部分の sources はまだどこにも指摘されていないから，わかるかぎりのものを注で示しておこう．全文はかなり長いので引用の前に簡単に要約すると，まずカンパネッラによるデカルトの「自然学」の讃辞にはじまり(12行—25行)，ついでシラノがデカルトの空虚否定にたいして，空虚がなければ運動不可能という反論をのべる(26行—54行)．これにたいしてカンパネッラは，デカルト氏なら自分で立派にお答えになるだろうと軽くいなし，つづいてデカルトの讃辞を長々とのべたあと(55行—83行)，最後にデカルトの原子否定論と空虚否定論を紹介する(84行—115行)．そしてシラノがもう一度反論しようとしたところでこの議論は終る．

Cependant il estoit pressé; car je me
souviens que m'estant avisé de luy demander
pourquoy il s'en retournoit auparavant d'a
voir reconnu toutes les régions de ce grand
5 Monde, il me répondit que l'impatience de

voir un de ses amis, lequel estoit nouvellement arrivé, l'obligeoit à rompre son voyage. Je reconnus par la suite de son discours que cet amy estoit ce fameux Philosophe de nostre
10 temps, Monsieur des Cartes, et qu'il ne se hastoit que pour le joindre.

Il me répondit encor sur ce que je luy demanday en quelle estime il avoit sa "Physique", qu'on ne la devoit lire qu'avec le
15 mesme respect qu'on écoute prononcer des Oracles.

"Ce n'est pas, adjouta-t'il, que la science des choses naturelles n'ait besoin, comme les autres Sciences, de préoccuper
20 nostre jugement d'axiomes qu'elle ne prouve point: mais les principes de la sienne sont simples et si naturels qu'estant supposez, il n'y en a aucune qui satisfasse plus nécessaire-
25 ment à toutes les apparences."
Je ne pûs, en cet endroit, m'empescher de l'interrompre:

"Mais, luy dis-je, il me semble que ce Philosophe a toûjours impugné le vuide; et cepen-
30 dant, quoy qu'il fut Epicurien (1), afin d'avoir l'honneur de donner un principe aux principes d'Epicure, c'est-à-dire aux atômes, il a étably pour commencement des choses un cahos de matière tout à fait solide, que Dieu divisa en
35 un nombre innombrable de petits carreaux, à chacun desquels il imprima des mouvemens opposez. Or il veut que ces cubes, en se froissant l'un contre l'autre, se soient égrugez en parcelles

de toutes sortes de figures: mais comment peut-
40 il concevoir que ces pièces quarrées ayent commencé de tourner séparément, sans avouër qu'il s'est fait du vuide entre leurs angles? Ne s'en rencontroit-il pas nécessairement dans les espaces que les angles de ces carreaux estoient
45 contraints d'abandonner pour se mouvoir? Et puis ces carreaux qui n'occupoient qu'une certaine étendue, avant que de tourner, peuvent-ils s'estre meus en cercle, qu'ils n'en ayent occupé dans leur circonférence encor une fois
50 autant? La Géométrie nous enseigne que cela ne se peut: Donc la moitié de cette espace a deub nécessairement demeurer vuide, puis qu'il n'y avoit point encor d'atômes pour la remplir(2).„

55 Mon Philosophe me répondit que Monsieur des Cartes nous rendroit raison de cela luy-mesme, et qu'estant né aussi obligeant que Philosophe, il seroit asseurément ravi de trouver en ce Monde un Homme mortel pour
60 l'éclaircir de cent doutes que la surprise de la mort l'avoit contraint de laisser à la Terre qu'il venoit de quitter; qu'il ne croyoit pas qu'il eût grande difficulté à y répondre suivant ses principes que je n'a-
65 vois examinez qu'autant que la foiblesse de mon esprit me le pouvoit permettre, "parce, disoit-il, que les ouvrages de ce grand Homme sont si pleins et si subtils, qu'il faut une attention pour les entendre qui de-
70 mande l'âme d'un vray et consommé Philoso-

phe: ce qui fait qu'il n'y a pas un Philosophe dans le Soleil qui n'ayt de la vénération pour luy; jusque-là que l'on ne veut pas luy contester le premier rang, si sa modestie ne l'en éloigne.

"Pour tromper la peine que lq longueur du chemin pourroit vous apporter, nous en discourerons suivant ses principes qui sont asseurément si clairs, et semblent si bien satisfaire à tout par l'admirable lumière de ce grand Génie, qu'on diroit qu'il a concouru à la belle et magnifique structure de cet Univers(3).

"Vous vous souvenez bien qu'il dit que nostre entendement est finy: ainsi la matière estant divisible à l'infiny, il ne faut pas douter que c'est une de ces choses qu'il ne peut comprendre ny imaginer, et qu'il est bien au-dessus de luy d'en rendre raison(4)."

"Mais, dit-il, quoy que cela ne puisse tomber sous les sens, nous ne laissons pas de concevoir que cela se fait par la connaissance que nous avons de la matière; et nous ne devons pas, dit-il, hésiter à déterminer nostre jugement sur les choses que nous concevons(4)." En effet, pouvons-nous imaginer la manière dont l'âme agit sur le corps? Cependant on ne peut nier cette vérité, ny la révoquer en doute; au lieu que c'est une absurdité bien plus grande d'attribuer au vuide <u>une espace qui est une pro-</u>

priété qui appartient au corps de l'étendue,
veu que l'on confondroit l'idée du rien avec
105 celle de l'estre, et que l'on luy donneroit
des qualitez, à luy qui ne peut rien pro-
duire et ne peut estre autheur de qhoy que
ce soit(5). Mais, dit-il, pauvre mortel, je
sens que ces spéculations te fatiguent parce
110 que, comme dit cet excellent Homme, "tu n'as
jamais pris peine à bien épurer ton esprit
d'avec la masse de ton corps, et parce que
tu l'as rendu si paresseux qu'il ne veut plus
faire aucunes fonctions sans le secours des
115 sens."

Je luy allois répartir, lors qu'il me
tira par le bras pour me montrer un valon de
merveilleuse beauté (pp.183-185).(6)

この箇所にたいして Paul Lacroix などシラノ・カルテジヤン派は，カンパネッラによるデカルト讃辞とデカルト説の開陳があるという理由で，これをシラノ・カルテジヤンの証拠とし，シラノによる反論の方はまるで無視してしまっている[7]．他方 Alcover 女史は，シラノがここでデカルトを二度も反論し，そんなに執拗に反論することはシラノとしては他に例のないことだという理由でシラノ・カルテジヤン説を否定して，カンパネッラによる讃辞の存在や意味などは全く無視している[8]．最後に Harth 女史は，賛否両論があるという理由で，シラノがここでは態度を決めかねていると簡単に結論を出している[9]．だがこの箇所の讃辞あるいは反論の一方だけをとりあげて，他を無視する一面的な解釈は論外としても，賛否両論があるから態度未決定だ，ではあまりにも単純である．もう少し詳細な，掘り下げた分析の上に立って，もう少し説得的な結論が出せないものだろうか．

まずシラノの反論を調べると，たしかに Alcover 女史の主張するように，シラノがここではデカルト説を受入れていないのは確実であると思われる．第

一にシラノは大体相手の云い分は大人しく聞いているのであって，こんなにむきになって二度も反論するのは珍しい（*Lune* の終で，無神論を主張する若者に反対するくだりなどの，あのみえすいた反論（89頁—96頁）は別としてである）．つぎにシラノの反論は詳しい念の入ったものである上，その前に「私はここで彼の話をさえぎらずにはいられなかった」（26行—27行）と書いて，反駁する気持の激しさを十分に示そうとしている．さらにシラノの反論の内容を見ると，これは空虚がなければ運動は不可能であるという論拠だが，シラノは同じ論拠をすでに *Lune* の中で，スペイン人の真空肯定論者に別の例でもって語らせている[10]．そして今度は『哲学原理』を読んだのち，『哲学原理』の宇宙創成説という，デカルトに直接照準をあてた実例をとりあげて同じ空虚肯定の論拠をくりかえしたのであって，シラノの空虚肯定論は一朝一夕の思いつきでなく，ずいぶん根強いものであるといえる．さらに付加えるならば，ここで議論になっている空虚の存在，非存在の問題と，つぎにカンパネッラがとりあげ，シラノが反対する物質の無限可分性如何の問題，つまり原子の存在，非存在の問題とは，どっちでもいい枝葉の問題でなく，デカルト自然学の根本にかかわる問題であり，カルテジヤンか否かを見分ける試金石といってよい[11]．シラノはまさに問題の核心を衝いたのであり，しかもその上で反カルテジヤンとしての旗幟をはっきり表明したものというべきであろう．

それではカンパネッラに語らせているデカルト讃辞はどう解すればよいのか．この「当代高名の哲学者」（9行—10行），「この偉大な天才のすばらしい光」（80行—81行）やまた「太陽で彼に尊崇の念を抱かぬ哲学者は一人もいず，もしも彼の謙虚さが彼をそれから遠ざけないなら，彼に第一の位をあたえることに異議を唱えるものはないくらいなのだよ」（71行—75行）とか，さらに彼の自然学は「神託」のようだ（14行—16行）などの言葉はたしかに尋常のものではない．だが，以上の抽象的な言葉は一応別として，デカルト讃辞を仔細に吟味すれば，それが百パーセント文句なしの賞讃ではなく，いくらかの留保ないし批評が含まれていること，つまりデカルト説のすぐれた点にたいする評価とともに，その欠点の認識，というのがつよすぎるとすれば，かすかな不満の表明

もちゃんと含まれていることがわかるのである．

では彼のデカルトにたいする不満ないし留保はどういう点に関してなのか．まず冒頭でカンパネッラは，デカルトの「自然学」すなわち『哲学原理』が「神託」のようだと讃めたのち，つぎのようにつづける．「そうはいっても自然的な事柄に関する学問が…全く証明されていない公理をわれわれの判断に前もって信じこませる必要がないというのではない．だがデカルト氏の自然学の諸原理は単純で実に自然で，はじめにそれを仮定してしまうと，あらゆる現象にこれほど必然的にあてはまる自然学はどれ一つとしてないほどなのだ」(17行—25行)．すなわちデカルトの「自然学」も，その「原理」はたしかに「単純」で，「自然」で，しかも「あらゆる現象」を十分に説明しうるけれども，その「原理」そのものは「全く証明されていない仮定」にすぎない．そしてこの場合デカルト「自然学」の原理とは，『哲学原理』第二部が≪Des Principes des choses materielles≫と題されているところをみれば，そこで扱われている物体＝空間説と，そこから必然的に導き出される空虚否定説，および物体の無限可分性すなわち原子否定説などであろう[12]が，そうだとすると，これらは，シラノがさっき自分の口で反論したデカルト説にほかならず，こうしてカンパネッラによる讃辞からみても，シラノのデカルト自然学にたいする反対の根拠は同じであり，依然としてつよいことがわかる．それだけではない．その原理が具体的な現象に適用される部分にも，デカルトがその「突然の死によって地球上に残さざるをえなかったからだ」と断ってはいるが，ともかく，「数多くの疑点」があることも指摘されている（60行—62行）．さらにまたデカルトの作品が難解であることもくりかえしのべられている．彼の原理を，君は君の精神の弱さがそれを許す範囲においてしか検討しなかったのだ」(64行—66行)とか，「この偉大な人物の作品は極めて充実し，極めて精緻なので，それを理解するには真の完全な哲学者の魂を要求する注意力がなければならない」（67行—71行）などの文章が示すとおりである．

だがそれにしてもカンパネッラのデカルトにたいする，前述のような最高級の讃辞はただごとではない．ではこのような異論や不備にもかかわらず，シラ

ノがデカルトに惹かれるとすれば，それは一体どういう理由によるのだろうか．それは，すでに先程引用したように，その原理の「単純さ」，「自然さ」，「明晰」であり，しかも単純明晰な小数の原理でもって「すべての現象」を説明しえていることである（21行—25行，および78行—80行）．これはシラノ一人の評価ではなく当時のカルテジヤンの一致した意見であり，またマルブランシュの有名な例が示すように，少なからぬすぐれた青年をカルテジヤンに改宗させた最大の理由でもあった．その読書歴からいってもユマニスト的伝統に大した共感を示していないシラノが，デカルト説の「単純さ」，「明晰」に惹かれたのは十分納得できるが，それにしても前述のように同じ讃辞を二度もくりかえしていることは注目に価する．またとくに「すべての現象」の中でも「この宇宙の美事な荘麗な構造の解明に資した」（81行—83行）点を強調しているのは，前稿の（**b**）で，宇宙の生成，太陽系の誕生と衰退に関するデカルトの天才的な着想を，いちはやく大筋において採用している点に符合するし，（**d**）で「有溝微小部分」の極からの出入りという荘大な仮設を借用したことにも無縁でなく，シラノが，デカルトの自然学のうちでも一番関心をもち，気に入った部分がここであることを示しているように思われる．

こうしてデカルトの自然学は，シラノが冒頭でいみじくも評したとおり，「神託」のようなものであって，「神託」のようにすばらしく，意味深いと同時に，「神託」のように証明がなく，「神託」のように常人の理解を超えて難解なのである．それでは，「弱い精神」には極めて難解な，しかし，抗し難い魅力をもつ「デカルト氏の自然学」を真に理解するためにはどうすればよいのか．そのためには，カンパネッラの説くところによると，「怠け者で，感覚の助けなしにはどんな働きもしようとしない」精神を「重い肉体から引離して純粋なものにする」（111行—115行）ことによって，「真の完全な哲学者の魂」（70行—71行）を獲得しなければならないというのだけれども，このあたりデカルトの説をくりかえしているようでありながら，そこに微妙な相違があることに注目しなければならない．ここでカンパネッラが口にする「哲学者」とか「哲学者の魂」は，ただ単にデカルトのいうところの，感覚にとらわれず，先入見をもつ

ことなく，理性によって真偽を判断しうる人間または能力ではなくて，常人を超えた存在，「偉大な天才」(81行) であり，カンパネッラをはじめルネサンス哲学者がそうだったように，「予言者」，「占星術者」，「魔術師」なのであり[13]，また「哲学者の魂」は，このデカルト論争の直前におかれた一節によれば，「他の人間の魂」とは全くその構成から異っていて，前者と後者の相違は，まさしく「金，ダイヤモンド，恒星」と「その他の物質」との相違なのであった[14]．また「肉体から精神を純化する」という意味も，デカルトのように，単に，幼年時代から自然に植えつけられた先入見を捨て去り，理性によって正しく判断しうるようになるということではなく，ここでは，デカルト論争の直後に登場する「眠りの湖」や，そこから発散するところの，「精神を感覚の妨害から完全に純化する特性をそなえた気」[15]とか，論争の直前に描かれたイメイジ，すなわち一つの植物，一箇の動物，一人の人間の息が絶えると，その魂は「日の源と一つになり，自分を妨げていた粗雑な物質から洗い清められて，生長したり，感じたり，推論したりするよりはるかに高貴な機能を働かせる」，つまり「あの偉大にして完全なる動物，太陽の血となり生命力となる」といったイメイジ[16]とむすびつく．そしてこうした一種秘教的なふんいきがまた，デカルト哲学とは相容れない前後の文脈の中へ，このデカルト論争全体を無理なくはめこみ，前後と同じ色に染め上げることを可能にする要素でもあったといえるが，この一節の意味するところはただそれだけにとどまらない．そこからうかがいとれるものは，シラノの極めて特異なデカルト観，超能力者，常人とは質的に異った「哲学者」，いわばルネサンス的哲学者としてのデカルト像であって，同じことはまた，この小説の最後で，デカルトが実際に登場する場面の一節によっても裏付けられるのである．すなわちそこでは，デカルトが三里先に到着していることを感じとったカンパネッラの超能力におどろくシラノに向って，カンパネッラがつぎのように説明する．

Il s'exale de tous les corps des espèces, c'est-à-dire des images corporelles qui voltigent en l'air. Or ces images conservent

toûjours malgré leur agitation, la figure, la couleur et toutes les autres proportions de l'objet dont elles parlent; mais comme elles sont très-subtiles et très-déliées, elles passent au travers nos organes sans y causer aucune sensation; elles vont jusqu'à l'âme, où elles s'impriment à cause de la délicatesse de sa substance, et luy font ainsy voir des choses très éloignées que les sens ne peuvent apercevoir: ce qui arrive icy ordinairement, où l'esprit n'est point engagé dans un corps formé de matière grossière comme dans ton Monde. Nous te dirons comment cela se fait, lors que nous aurons eu le loisir de satisfaire pleinement l'ardeur que nous avons mutuellement de nous entretenir; car, asseurément, tu mérite bien qu'on ait pour toy la dernière complaisance (p.199).

すなわちここでカンパネッラが語るのは，カンパネッラにこそふさわしいテレパシーの能力と，その能力を説明するものとしては，エピクロス，ルクレティウス以来の古めかしい Simulacre 説であり，後者の方は小説の別の箇所では，小さいけれどもやはり物質的なこういう像を，あまりにつめこみすぎたために，頭脳を破裂させてしまった哲学者のピトレスクな描写(190頁—191頁)としても登場しているが，シラノはここで，「どうしてそうなるのか私たち（カンパネッラとデカルト）はきみに話してあげよう」と，これらの思想があたかもデカルトの同意できる説であるかのように書いている．この，デカルトとは全く相容れない思想をデカルトに帰する根拠がどこにあるのか明らかでないが，少くとも前述の「感覚の助けなしにはどんな働きもしようとしない」精神を「重い肉体から引離して純粋にし，感覚を超えたものを見る可能性を説くデカ

ルトのイメイジとは無理なくむすびつくとはいえるのであって，紙数の都合でこれ以上の詳述はさしひかえるが，シラノのこの全く独創的な秘教的デカルト解釈は極めて注目に価するものと考えられるのである．

なおシラノが描くデカルトの魅力ある人間像もやはりまた注目に価する．デカルトの論敵たちや，反デカルト陣営に属する人々の見たデカルト——その典型的な例を，われわれは，1647年9月25日付のジャクリーヌ・パスカルの手紙にみることができる[17]——とは対照的に，「謙虚」で（75行），「親切で」（57行），「ほほえみをもって答える」[18]デカルト，このシラノの極めて好意的なデカルトの人間像に，われわれは，デカルトを何の偏見もなしに理解し，もし納得がいくならば何の抵抗もなしに受入れようとする，開かれた態度をよみとることができるように思われる．

それから最後に是非付加えなければならないが，この *Soleil* という作品が未完であるということも，シラノ・カルテジヤンの問題を考える際一応留意しておいていいだろう．シラノがこの作品を意図的に未完の形で残したとする説が，多数意見でもなく，また十分説得性をもっているともいいがたい現状[19]では，最後にデカルトその人が登場して，いよいよ語り出そうというときに尻切れとんぼで終るのは大へん気になるのであって，前述のデカルト論争の中で，シラノの反論にたいしてカンパネッラが，あとで「自分でご説明になるでしょう」(55行—57行)と答えているだけなおさらその中断が惜しまれるのである．もしかしたらシラノがさっき反論した空虚否定説，原子否定説その他「数多くの疑点」が，もう一度ここでデカルトによって説得的に証明され，シラノはこの作品そのものの中でカルテジヤンに改宗するということもありえたかもしれない．これはもちろん単なる推測にすぎないが，しかし最後の場面で登場するデカルトの極めて好意的な描き方は，このような可能性を想定するための十分な理由を提供するものと考えられるのである．

以上でデカルト論争に関する項目（**e**）を一応終る．ここで最後にこの（**e**）全体を総括すべきところだが，紙数の制約もあり，またすぐあとでシラノ・カルジヤンの問題全体についてまとめるので，ダブる点も多いと思うから，割愛

して直ちに全体の結論へ進むことにする.

*

前稿と本稿で，シラノの空想旅行記におけるデカルトの影響を（**a**）～（**e**）の5項目にわたって考察したので，ここで最後にそれをもう一度整理して，前稿の終りでのべた，いわゆる「暫定的結論」を引き出すことにしよう.

(1) まず第一作 ***Lune*** にはデカルトの影響は見られなかったが，***Soleil*** では諸家の主張する5箇所を検討した結果，デカルト以外から借用されることがありえないと思われる箇所は，（**b**），（**d**）の2つであるが，みとめられた．また（**e**）でもデカルトにたいする強い関心が認められた．こうして Spink 氏などシラノにデカルトの影響を認めない諸家の立論[20]は崩壊したことになるが，同時にデカルトの影響がうかがえる箇所の数は Alcover 女史らの主張するより少ないことも確認されたことになる.

(2) ではデカルトの思想そのものを議論する（**e**）は一応別として，（**b**），（**d**）におけるデカルト借用はどういういみをもつのか．まず（**d**）の「有溝微小部分」の地球への出入りは，『哲学原理』の中でもおそらくもっともファンタスティックな着想の一つであろうが，シラノはそれをさらに強調した上，デカルトのこの奇抜なアイディアを，デカルトとは無縁な，シラノ自身のアニミスティックな世界観の説明にただ利用したにすぎなかった．また（**b**）で宇宙の創成，太陽系の生成，衰退についてのデカルトの天才的な仮説をいちはやくとりあげたのはシラノの卓見といえるが，ここでもかれは，デカルトのアイディアは採用しながら，同時にデカルトの空虚否定論は受入れなかったために，大へん苦労してデカルト説を自分流につくりかえていたし，また同類が同類を呼ぶあの「未知の愛なる原理」という，デカルトとはまったく異質な原理が登場して，シラノ独特の思想的ふんいきをつくり出すのである．このようにデカルトからの借用は，数が少ない上に，シラノの手による作りかえ，異質な思想の挿入によって，この ***Soleil*** という作品中随所にみられる想像力の高揚，≪langue matrice≫の説による自然や本能の強調，âme du monde の一部であるところの「火性の小物体」，「生命の小物体」，「魂」による万物の生成の説明，またさま

ざまなアレゴリーやサンボリスムなど，デカルトとは全く異質の思想的ふんいきの中にのみこまれてしまった感がある．また最後の（**e**）でも，カルテジヤンとガッサンディストが鋭く対立する空虚の問題と原子の問題という，当時の自然学の中心課題において，シラノはデカルトの説に根強く反対しており，とうていこれを受入れているとはいえないことが確認された．したがって ***Lune*** においてはもちろん ***Soleil*** でも，シラノがカルテジヤンになったと主張することはできないであろうと思われる．

(3) だが，以上のように，シラノがカルテジヤンだといえないにしても，この作品の各所に見られるデカルトへの強い関心は注目に価する．まず前述（**d**）で触れたように，作品の冒頭から，シラノが「デカルト氏の自然学」すなわち『哲学原理』を読んだことをほのめかす条りがでて[21]，この作品におけるデカルトの大きな影を予感させる．また（**e**）ではデカルトの「自然学」すなわち『哲学原理』をめぐって長い議論をした上，とくにカンパネッラには，何度もくりかえしてデカルトについて最大級の讃辞を語らせ，デカルトにたいする並々ならぬ関心をうかがわせている．またここでシラノがデカルト説に反論する執拗さは，先にのべたごとく，彼がカルテジヤンであることを否定する根拠になると同時に，彼のデカルトにたいする関心のつよさをも示すといえるかもしれない．さらに最後に登場するデカルトその人の極めて好意的な描き方は，彼のデカルトにたいする，悪意からも悪い先入見からもとおい，開かれた，積極的な姿勢を示していて，これらすべては，前述のように，未完に終ったこの作品の書かれなかった，もしくは失われた部分において，シラノがあるいはカルテジヤンに変貌したかもしれない可能性をすらうかがわせるともいえるが，そこまで推測を押進めない場合でも，少なくともシラノの，真摯に虚心にデカルト説を究めようとする意欲は十分うかがわせるに足りる．次稿で扱うかれの ***Fragment de physique***, すなわちデカルトの自然学を，おそらくカルテジヤン，Rohault の指導の下に勉強した結実ともいうべきこの未完の作品の分析は，その意味からも興味津々たるものがあるといえるだろう．

(4) 最後にシラノがデカルトの思想のどの面にとくに関心を示したのか，ま

た彼のデカルト理解の独創性はどこにあるのかを略述して，このすでに長い稿を終ることにしよう．冒頭や（**e**）でデカルトの『哲学原理』を「デカルト氏の自然学」とよんでいる[22]ことからもうかがえるように，デカルトの中で彼の興味をひいたのは何よりもその自然学であった．（**b**），（**d**）でデカルトから借用したのも自然学の中のアイディアだったし，（**e**）での長い議論が展開するのも主としてデカルトの自然学をめぐってであった．デカルトを何よりもまずすぐれた自然学者としてとらえるこのような見方は，17世紀後半にはひろく行なわれたデカルト理解の仕方だから，その意味では別にとくに珍しくないが，1650年前後という時期的な早さと，専門の科学者でもないシラノの，しかも文学作品へのデカルト自然学の登場とは注目に価すると思われる．だがそれよりもなお一そう注目に価するのは，（**b**），（**d**）にみられるように，デカルトの自然学のもつ想像力やファンタスティックな面をとくに強調するシラノの独特な視点であって，それは（**e**）でみられた秘教的デカルト解釈と相俟って，天才的な想像力の飛翔により，常人の見ない世界の構造，意味を把握しえた見者（ヴォワイヤン），重い肉体の束縛から脱し，感覚を否定するが，それによって万人共通の理性を強調するどころか，かえって，凡俗のうかがいえぬ超能力を行使するルネサンス的哲学者としてのデカルト像を鮮やかに描き出す．この極めて特異なデカルト解釈はおそらく他に類例を見ないのであって，同じくリベルタンのDes Barreauxが，不老長生の術を発見したというデカルトを訪ねて，オランダに行ったとか行こうとしたとかいう，はるかに漠然とした一例[23]をわずかに筆者は聞知するのみである．そうしてアルノーやボスュエらの見たデカルト，すなわち神の存在と霊魂の不滅を，新しい確実な基盤の上に証明しえた正統哲学者（オルトドクス）デカルトとも，またフォントネルらの描いた，機械論的宇宙観の創始者，合理的方法の発見者デカルトとも，似ても似つかぬこの奇抜なデカルト像は，またそれを可能にしたシラノ独特の哲学を予想させるのであるが，それの解明はつぎの機会にゆずらなければならない．

注

紙数の都合で，注は最小限にとどめざるをえなかったことを，あらかじめおことわりしておく．

1) 三種類の「微小部分」の大きさ，形，運動でもって，すべての自然現象を説明するデカルトが，エピキュリヤンと誤解されるのは当時珍しいことではなかった．Cf. Alcover, *La pensée philosophique et scientifique de Cyrano de Bergerac*, 1970, p. 137 et Bernard Rochot, *Les travaux de Gassendi sur Epicure et sur l'atomisme, 1619—1658*, 1944, p. 171.

2) ここで攻撃されているデカルトの仮説は *Principes*, Ⅲ-46. *Quelles sont ces suppositions* の中で展開されている．なお同じ箇所にたいするガッサンディの言及としては，1645年1月28日付の Rivet 宛の手紙に以下の一節がある．≪Il n'est pas nécessaire de citer les points particuliers ; car dès les premiers principes : que le monde matériel est infini, ou comme il subtilise, indéfini ; qu'il est lui-même absolument plein et ne se distingue pas de l'étendue ; qu'il peut être broyé en diverses manières sans interposition de vide ; et d'autres du même genre ; qui ne voit combien tout cela entraîne de difficultés et de contradictions?...≫, (Rochot, *op. cit.*, p. 124, note 172). ちなみにこの問題は，シラノの死後40年経った17世紀末でもまだホットな論点であった．たとえばガッサンディストの Charles Perrault が『哲学原理』の同じ箇所にたいして，シラノと同じ反論を呈しているし，また他方カルテジヤンの Régis は，やはり同じ箇所にたいして，ガッザンディストたちの反駁をふまえた上で，師の説を詳しく再弁論している（Cf. Régis, *Système de philosophie*, 1690, tome I, pp. 329—330). Perrault の反論は短いから以下に引用しておこう．

≪J'ay toûjours été indigné ou plustost j'ay toûjours ri de voir Descartes, qui entreprend de créer le Monde, & qui même ne s'en fait pas une affaire,car il ne demande qu'une seule chose pour en venir à bout : une Matiere coupée en petits carrez qu'on fasse mouvoir en rond ; ne songeant pas qu'il n'admet point de vuide dans la Nature, sans lequel il est impossible que des Carrez qui se touchent par toutes leurs faces se meuvent en rond...≫, (Perrault, *Parallele des Anciens et des Modernes*, tome Ⅳ, 1697, p. 163).

3) ≪Nous commencerons par ceux 〔les phénomènes〕 qui sont les plus généraux et dont tous les autres dépendent, à savoir par *l'admirable structure de ce monde visible*≫. (*Principes*, Ⅲ-1. *Du monde visible*).

4) ≪Et bien que nous n'entendions pas comment se fait cette division indéfinie, nous ne devons point douter qu'elle ne se fasse, parce que nous apercevons

qu'elle suit nécessairement de la nature de la matière, dont nous avons déjà une connaissance très distincte, et que nous apercevons aussi que cette vérité est du nombre de celles que nous ne saurions comprendre, à cause que notre pensée est finie≫, (*Principes*, II-35). Cf. aussi *Principes*, II-20.

5) Cf. *Principes*, II-16.

6) 以下シラノの引用は Lachèvre, *Oeuvres libertines de Cyrano de Bergerac*, tome I により，前稿と同様，ページ数のみを記す.

7) 前稿の注4)，注5)を見よ.

8) Alcover, *op. cit.*, pp. 136—140 et surtout p. 139.

9) 前稿の注9) を見よ.

10) ≪Mais, sans m'amuser à respondre à touttes leurs objections, j'ose bien dire que s'il n'y avoit point de vuide, il n'y auroit point de mouvement ou il fault admettre la pénétration des corps ; car il seroit trop ridicule de croire que quand une mouche pousse de l'aisle une parcelle d'air, cette parcelle en faict reculer devant elle une autre, cette autre encore une autre, et qu'ainsy l'agitation du petit orteil d'une puce allast faire une bosse derrière le Monde≫, (p.48). スペイン人の語るこの空虚肯定論や，またその他の興味ある空虚肯定論については，その sources とともに，*Fragment de physque* を扱う次稿でとりあげることにするが，Alcover 女史はこのスペイン人の話からつぎのような結論を出している. すなわちこのスペイン人とシラノは前後二回の対話をしているのだが，最初の対話では，スペイン人は，宇宙に一つの原素 élément しかないこと，および空虚が存在することを主張し（pp. 45—49. なお本文に引用の文章は，この第一の対話の中にある），第二の対話では，四原素があり，また空虚が存在しないと主張している（pp. 49—52). つまり女史によれば，シラノはここで二つの問題について相対立する両論を提示してみて，議論のための議論をやっているので，いわばあそんでいるのだという（Alcover, *op. cit.*, p. 45). 詳しく論ずる暇はないが，筆者としては女史のこの結論に賛成することはできない. まず物質がすべて一原素から成立っているとするか，または伝統的な四原素説を採用するかという第一の点に関しては，シラノの真意は明らかに前者にあるといえる. というのは四原素説を一応認めているような第二の対話でも，最後を「だがわれわれには，第一物質 matière première とよびたいものをわれわれの感覚に映ずるようにしてくれる一人のプロメテウスが欠けているのです」(p. 52)と結んでいるからである. また空虚が存在するか，しないかという第二の問題についていえば，第一の対話では空虚の存在自体を本格的にとりあげて，数ページにわたって論証しているのにたいし，第二の対話では話のついでに≪nous voyons la terre toutte poreuse, jusques aux grains de sablon qui la composent. Cependant, personne n'a dit encore que ces creus fussent remplis de vuide ; on ne trouvera donc pas mau-

vais que l'air y fasse son domicile≫, (p. 50) と触れているだけであり，しかもすでに Maurice Laugaa 氏が女史のこの研究の書評で指摘しているように (*RHLF*, 1973, No 4, p. 681)，第二の対話そのものの中にもまた空虚の存在を肯定する箇所もある．≪〔l'air〕 remplit le vuide que la Nature faict≫ (p. 51)．したがってここでもシラノの真意は，明らかに第一の対話の空虚肯定論にあると思われるので，本文で引用の箇所を含めて，第一の対話で展開されている空虚肯定論をまじめに取上げて，ここで筆者自身の論証に利用することは十分許されると思う．

11) 当時のデカルト反対派が，デカルトの自然学の体系の中で最も強く攻撃したのが，この二つの問題であったことは，つぎの有名なエピソードによっても知られる．すなわち *Soleil* の執筆とほぼ同時期の1648年6月，デカルトの最後のパリ滞在中に，デカルトの年来の論敵ロベルヴァルはかれに執拗に論争を求めたが，それもこの二点についてであった．≪Ce fut le jour de la réconciliation des deux Philosophes〔Descartes et Gassendi〕que M. de Roberval entreprit pour la prémiére fois de démontrer l'impossibilité du mouvement sans le Vuide... M. de Roberval ne s'absentoit presque d'aucune des assemblées où il〔Descartes〕se trouvoit... Ce fut en l'une de ces assemblées... que M. de Roberval entreprit de pousser entiérement M. de Descartes à bout sur tous les points de sa Physique ausquels il étoit contraire... Il l'attaqua non seulement sur le Vuide et sur l'impossibilité du mouvement dans le Plein, mais encore sur les Atomes qu'il rejettoit, et sur la matiére qu'il supposoit divisible à l'indéfini≫, (Baillet, *La vie de Monsieur Des-Cartes*, 1691, tome II, pp. 344--345)．また先の注3）を参照．

12) 『哲学原理』第二部で扱われている主要な問題としては，それ以外に運動とその諸法則がある．

13) Blanchet, *Campanella*, 1920, p. 222.

14) ≪Il y a trois ordres d'Esprits dans toutes les Planètes, c'est-à-dire dans les petits Mondes qui se meuvent à l'entour de celuy-cy.

Les plus grossiers servent simplement à réparer l'embonpoint du Soleil. Les subtils s'insinuënt à la place de ses rayons ; mais ceux des Philosophes, sans avoir rien contracté d'impur dans leur exil, arrivent tout entiers à la sphère du jour pour en estre habitans. Or, ils ne deviennent pas, comme les autres, une partie intégrante de sa masse, pource que la matière qui les compose, au poinct de leur génération, se mesle si exactement que rien ne la peut plus déprendre : semblable à celle qui forme l'or, les diamans, et les Astres, dont toutes les parties sont meslées par tant d'enlacemens, que le plus fort dissolvant n'en sçauroit relâcher l'étrainte.

Or ces âmes de Philosophes sont tellement à l'égard des autres âmes, ce que

l'or, les diamans et les Astres sont à l'égard des autres corps, qu'Epicure dans le Soleil est le mesme Epicure qui vivoit jadis sur la Terre.≫, (p. 183).

15) ≪Pour moy, je pense que ce Lac évapore un air qui a la propriété d'épurer entièrement l'esprit de l'embarras des sens...≫, (p. 187).

16) ≪Ainsi dès qu'une Plante,une Beste ou un Honme expirent, leurs âmes montent, sans s'éteindre,à sa sphère,de mesme que vous voyez la flamme d'une chandelle y voler en pointe, malgré le suif qui la tient par les pieds. Or toutes ces âmes unies qu'elles sont à la source du jour, et purgées de la grosse matière qui les empeschoit, elles exercent des fonctions bien plus nobles que celles de croistre, de sentir et de raisonner ; car elles sont employées à former le sang et les esprits vitaux du Soleil, ce grand et parfait animal≫, (p. 182).

17) Pascal, *Oeuvres complètes*, Ed. Jean Mesnard, tome II, pp. 480—482.

18) ≪Ce Philosophe, qui leut ma passion sur mon visage, en fit le conte à son amy et le pria de trouver bon qu'il me contentât. M. des Cartes riposta d'un soûris, et mon sçavant Précepteur discourut de cette sorte...≫, (p. 199).

19) Toldo と Lachèvre によれば，シラノはこのユートピア物語を「Folengo の Baldus や Rabelais と同様」わざと未完成のままのこしたのではないかという(Cf, Toldo, *Les voyages merveilleux de Cyrano de Bergerac et de Swift et leurs rapports avec l'œuvre de Rabelais*, 1907, pp. 24－25 et Lachèvre, *Les Oeuvres libertines de Cyrano de Bergerac*, tome I, p. 199, note 1)が，シラノがフォレンゴを読んだかどうかは明らかでないし，ラブレーの『第五之書』の偽作説が17世紀において決定的であったという話もきかないから，両氏の仮説は証明を欠いているといわざるをえまい．また最近のシラノ研究家がこの仮説を採用している例も知らない．たとえば Alcover 女史によれば，シラノはアイディアも尽き，息切れがして未完成で終らざるをえなかったのであり（Alcover, *op. cit.*, p.146)，また Mongrédien 氏によれば，おそらく完結していたが，シラノの死の直前，原稿が盗まれて亡失したのであった（Mongrédien, *Cyrano de Bergerac*, p. 202).

20) 前稿の注７）参照.

21) 前稿の33頁参照.

22) 前稿の33頁および（**e**）で引用の文章の13行—14行参照.

23) Cf. Lachèvre, *Disciples et successeurs de Théophile de Viau. La Vie et les Poésies libertines inédites de Des Barreaux et de Saint-Pavin*, 1911, p. 211 et pp. 182-183.